人権作文入選作品（中学生の部）

自閉症スペクトラムについて

太宰府西中学校1年　S・K

僕は、自閉症スペクトラムという発達障害を持っています。見た目からはわからない障がいです。

僕は、話を聞くことと憶えることが苦手です。そのため忘れ物が多く、小学生のころからとても苦労しました。例えば、人の説明を聞こうとすると、関係のない時計の針が気になったり、掲示物が気になったりして集中できません。次にやることを指示されても終わったとたん、ほっとして気がゆるむと忘れてしまいます。

しかし、周りの先生や友達が助けてくれたり、メモを取ったりなど対策できることを知って、忘れ物も少しだけ減りました。困った時に支えてくれる家族や友人、先生がいてくれて感謝しています。それでも、完全に直すことは難しいのです。

僕が通っている支援学級やデイサービスでは、言葉を発するのが苦手な子、想像するのが苦手な子など、さまざまな子どもたちがいます。障がい者に限らずだれしも苦手なことはありますし、一般の人だから苦手なことが少ないということはないと思います。

今の僕には世の中を変えるような大きな力はありませんが、周りの人が受け入れて理解してくれる、困ったときに助けてくれる優しい社会を作りたいです。

そのためにも、僕自身が、さまざまな人の個性を受け入れ、偏見などをなくし、成長していくことができればと思います。

みんなが過ごしやすい街にするために

太宰府西中学校1年　松﨑　心愛

私は、小学生の時に聞いた東京パラリンピックの金メダリスト、道下美里選手と河口恵選手の講演が心に残っています。

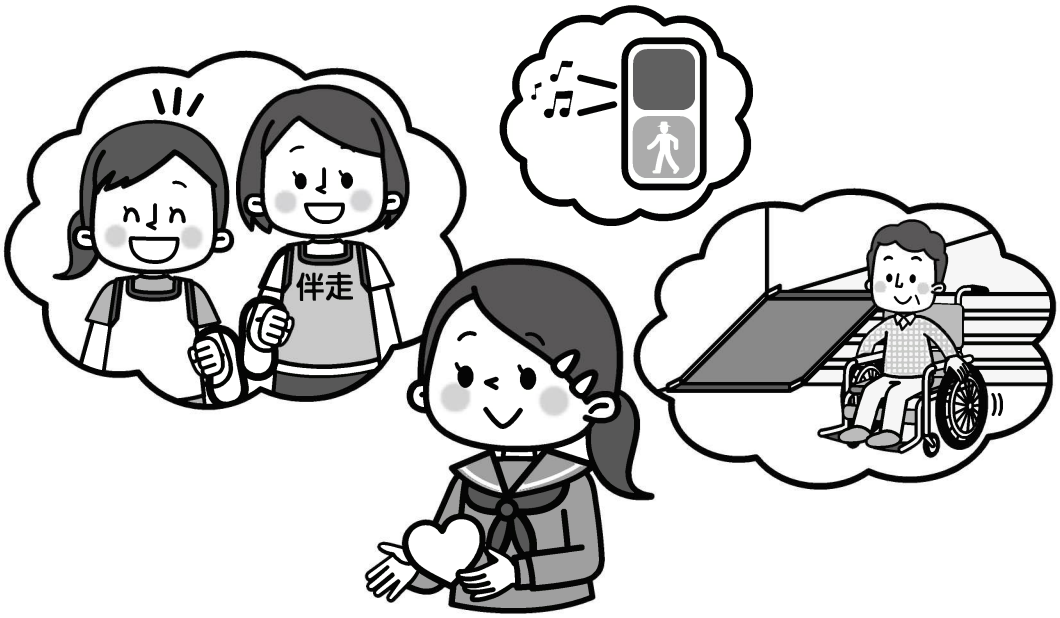
道下選手と河口選手は、いろいろなお話をしてくださいました。

その中で、クラスの友達がブラインド体験をしました。一人が目かくしをして、もう一人がひもで、サポートしながら歩きます。最初は道下選手と河口選手がお手本を見せてくださいました。道下選手は、河口選手の伴走で安心した様子で走っていてその姿にびっくりしました。

クラスの友達は不安そうでしたが、横に友達がいると、少し安心して歩けていました。一人では不安なことでも信頼できる人が一緒に協力をしてくれると安心するのだなと改めて感じました。だから、道下選手と河口選手は、歩くよりも難しい走ることを二人で力を合わせて道を進んでいけるのだと思いました。

私は、目が不自由な方のための音のなる信号機や車いすの方でも上りやすいスロープなども増えてきていますが、みんなが過ごしやすくするために、人の支えが大切だと思いました。

これから、そのような暮らしに少しでも近づけるように、街で、目が不自由な方や体が不自由な方、困っている方に気づいたら、声をかけ、少しでもお手伝いしたいです。私も困っているときに声をかけてもらうと安心するので、互いに声をかけ、みんなが過ごしやすくなれるといいです。



生きる権利

太宰府西中学校1年　橋本　光ノ介

「やっぱり戦争はなくならない。」

ロシアがウクライナを攻撃したニュースをテレビで見て、とても悲しい気持ちになった。どうして何度も同じ歴史を繰り返すのだろう。僕の心の中は、もやもやした何とも言えない悔しさでいっぱいだった。

小学校で戦争について教わり、戦争の悲惨さを身にしみて感じた。修学旅行で訪れた長崎では、原爆資料館などで思わず目を反らしたくなるような写真を見たり、当時の体験談を聞いたりして、「戦争なんて二度とあってはならない」と強く心に思った。

僕の曽祖父は、旧ビルマに日本軍として現地へ行って生き残った。そのときの話を母から聞いた。

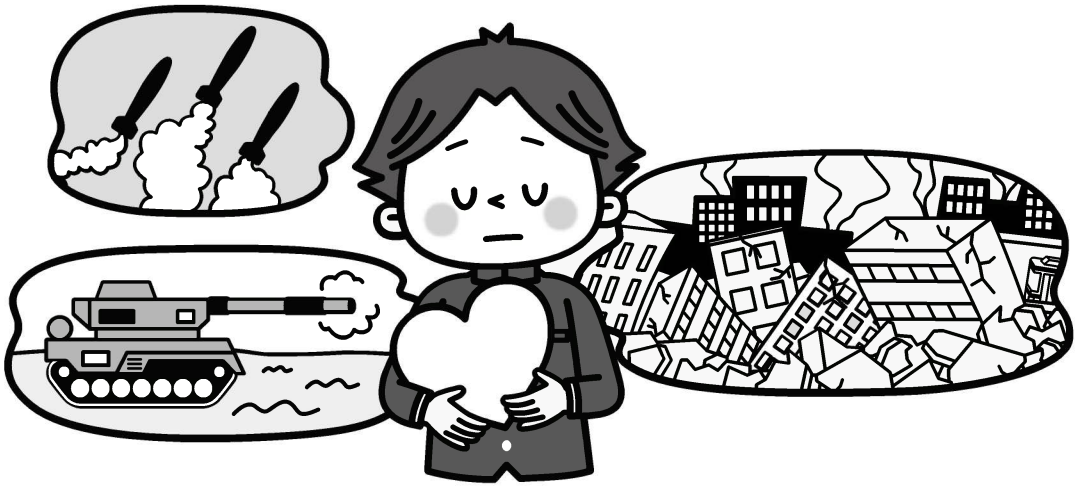
「戦争から生まれるものは何もない。人が人でなくな

り、自分も人の心を失い、ただ悲惨なだけだ。」

と言っていたそうだ。その言葉が重く心に響いた。お国のためと戦地に行かされ、一度しかない時間を奪われ、苦しい思いをした曽祖父の気持ちを考えると心が苦しくなった。

戦争に行った人だけではない。何の罪もない一般市民も犠牲になる。ウクライナの状況を見ても病院や学校、教会が爆撃され、昨日まで平和に暮らしていた人たちの命が一瞬にして奪われてしまっている。みんな戦争で死ぬために生まれてきたわけではない。幸せに生きる権利は平等にあるはずだ。どんな理由があっても人の命が理不尽に奪われることはあってはならない。

世界平和というのは簡単なことではない。今の僕にできることは人に対して思いやりを忘れず、人の生きる権利を奪わないよう声を上げていくことだと思う。



目に見えないハードル

学業院中学校2年　岡澤　妃花

待ちに待った夏休みが始まった。今まで学校や部活で忙しく、あまり一人暮らしの高齢の祖母に会うことができていなかった。そんな中、お盆に祖母とお墓参りに行くことになった。お墓は祖母の家から、車で二十分ほどの所にある。

「大きくなったね。」

久しぶりに会ったが、今までの祖母と変わりないようで安心した。

しかし、私が少し車体の高い父の車に乗ろうとした時、祖母は乗るのに時間がかかっていた。そして、ドアを閉めることさえも大変そうにしていたため、私が代わりに閉めてあげた。祖母は腰をさすりながら、

「ありがとうね。ちょっと大変でね。」

久しぶりに会った祖母が前まで普通にできていたことが難しくなっており、私はショックだった。

お墓までの道のりは車を降りて少し歩かなければならない。その間に十二・三段ほどの階段がある。私は階段をかけ登り、振り返ると祖母はやっと車を降りたところだった。両親が祖母に付きそって歩いている姿を見て、私は急に悲しくなった。

その他にも、フライパンなどを持つのが大変だったり、一人で買い物にも行けなくなったりしていた。

最近、テレビやスマホで耳にする「高齢者問題」。今まで考えてもみなかったが、実際に私の祖母の大変そうな姿を見て、高齢者が生きにくい社会になっていると感じた出来事をふと思い出した。

ある日、親から頼まれて、私がコンビニに牛乳を買いに行った時のことだった。

会計をしようとレジに並ぶと、腰の曲がった高齢の

おばあさんが、セルフレジの使い方が分からないらしく、店員さんに聞いたり、小銭を出すのにとても時間がかかっていたりした。私の後ろにいた、三十代くらいのスーツ姿の男性は、隣のレジに移動していた。

私は次だったので、我慢して待ったが、「正直、まだかなぁ。早く帰りたいのに。」と思ってしまう自分がいた。やっと、おばあさんの会計が終わった。おばあさんは、私の方を見て、申し訳なさそうに、

「ごめんなさい。」

と言った。私は、首を縦に振ったが、顔には笑顔がなかった。イライラしていたからだ。高齢者への思いやりがなかったのだ。私が、笑顔で一言、

「大丈夫ですよ。」

と言ってあげていたら、おばあさんは、少しは楽に買い物ができるようになるかもしれない。本当に、後悔している。

現代では、福祉は充実しているが、ここ最近、社会のデジタル化が進み、高齢者にとっては、ハードルが高い社会となっている。私達と違って、訳が分からないことばかりだろう。

だからこそ、一人一人の思いやる心が、高齢者が安心して住みやすい世の中にするのではないだろうか。

祖母に対しても同じだ。荷物を持ってあげたり、体を支えてあげたり、手を貸したりと私にできる範囲で手伝いをしていきたいと思う。そして、私達が高齢者の人権について考えていくことが大切だと思う。高齢者が生き生きと暮らせる社会を作っていくために、相手の気持ちを考えて、接することを日々心がけていきたい。

個性の大きさ

学業院中学校2年　下野　ましろ

私の近所には、二十歳のダウン症による障がいをもっているお兄さんが住んでいます。私が今の家に引越してきた四歳の時から、お兄さんの家の人たちによくしてもらっています。私が初めて会った時は、他の大人と何か違う感じがして少し怖かったのを覚えています。確かにそのお兄さんは、他の人のように私に話しかけてくれたり、自分で歩いて一人で行動したりはしません。しかし、私の犬とあったら必ずなでてくれるし、家の前で会ったら手を振ってくれます。今では最初怖がっていた自分が少しはずかしいです。そして私がいつもすごいなと思うのは、そのお兄さんのお母さんのことです。私と会うたびに話しかけてくれるし、お家で育てているお花はすごくきれいだし、何よりもとても明るい人だからです。障がいをもった子どもを育てるのは、きっと思いどおりにならないこともたくさんあるだろうし、自分よりも背の高い人をおんぶして歩くのはきつそうで、いつも少し心配です。でも、そんな中でも明るくて私のような家族以外の人にも目を向けられるのは本当にすごいと思います。

人権作文では、よく障がいをもつ人への差別について書かれていることがあります。私も差別は絶対にあってほしくないと思っています。でも、私が実際に近くで見て感じたのは、障がいがあることによって、困ることがたくさんあっても、いつもみんな負けないように毎日がんばっていて、逆にその環境ではないと見えないかっこよさや素敵な部分が見えるんじゃないかということです。だから私は差別をなくすというのは、違いを見ないフリするのではなくて、一人一人の違いからその人の素敵な所を見つけ出すということなのではないかなと思います。

だから、私がこの作文を通して伝えたいのは、障がいをもつ人は確かに障がいをもっていない人より大変な生活だろうけど、その分もっていない人とは違う素敵な部分があるということをもっと知ってほしいからです。海外では、障がいをもっている人のことを、「神様から特別な試練を与えられた幸運な人」と言うそうです。このことを知った時に、この考えがもっといろいろな人に広がってほしいなと思いました。今まで私は差別をなくそう、障がい者の人に普通に接しよう、という人達に少し違和感がありました。だって、AB型はA型より珍しいし、左利きの子は右利きよりも少ないけど、私や私の友達は、AB型は自分の意見をしっかり言える人が多いよねとか、左利きって天才が多いらしいねとか、自分とちがう所がある人もその人だけのいい所に気づけていて、だからきっとみんな障がいをもっている人でももっていない人でもその人なりのいい所に気づけると思います。一人でも多くの人がそれに気づくことができて、私のように差別に対する見方がガラっと変わって、周りの人もそれに影響されて、どんどんこの気づきが広がっていってほしいです。この気づきがない人は、人それぞれある個性の中で、障がいという個性を他よりも大きく見てしまうんだと思います。だから私は、障がいをもっている人ももっていない人も、左利きも右利きもみんな同じ大きさの個性として見たいです。

そうしたら、差別はなくなって、でもその人だけのいい所を見つけられて、お互いに尊重できるようになって、もっとみんなが過ごしやすくなると思います。だから私は、今の気持ちを忘れないように、いろんな人のいい所に気づいて、みんなが輝ける世の中を目指したいです。

十人十色なわたしたち

学業院中学校2年　今井　双葉

小さい頃、このような場面はありませんでしたか？自分が友達とケンカをして、間に入った先生が、

「お互いにごめんなさいして？二人とも仲良くね。」

と言ってあまり納得がいかないまま、仲直りをしたことが。私は保育園でこのような経験が何度かあり、納得がいかなくても、

「皆が仲良くするためには、仕方がないことだよね……。」

と考えてきました。

それから中学生になって、友達同士がケンカをしたり、いろいろな子から悪口、陰口を聞いたりすることが多々ありました。そのため、私はだんだん皆が仲良くするのは無理かもしれない……と思えてきました。そのような考え方で、人と付き合っていくのはいけないかもしれません。しかし、今まで会ってきた中でもさまざまな人がいて、意見が合う人もいれば、全く違う人もいました。多種多様な考え方をもった人がいる中で、全員が全員と仲良く付き合っていけるとは、やっぱり私は到底思えません。

自分がされて嫌なことは、人にしない、言わない。とよく聞きます。

ある日、友達が、

「このお菓子、おいしくて好きなんだよね！」

と言ったことに対し、別の友達が、

「私、これおいしくないから嫌い！」

と言ったのです。私は、腹が立ちました。好きなものを否定されたら誰だって嫌な気持になるはずなのに、なぜわざわざ声を出して否定するのでしょう。私は怒ってその子に

「なんでわざわざそれが好きな子の前で嫌いだって言うの？自分だって好きな物を否定されたら嫌だなって

思うでしょう？」

と言いました。すると、

「私は好きな物を否定されてもそうは思わないから。」

と返されたので、驚いてしまいました。そのような考え方をもっている人もいるのだなと思いました。その子にとって、人が好きなものをその人の前で嫌いだと言うことは、「自分がされて嫌なこと」ではないのです。前にも言った通り、さまざまな考え方の人がいるので、この人は何とも感じなくても、この人は嫌な気持ちになるというように、一人一人の感じ方、受け取り方が異なってしまうことがあります。だから皆、「自分がされて嫌なこと」の基準が異なるのです。しかし、それではその人が傷つけようと思っていない発言でも、人を傷つけてしまう可能性があります。私も、もしかすると自分がされて嫌ではないと思ってしていたことで人を知らないうちに傷つけてしまっていたのかもしれません。

このようなことが起きてしまうと、言われた人はとても悲しくなってしまいます。そこで私はどうすればいいのかを考えてみました。そのようなことをなくしていくためには、「自分がされて嫌なことは人にしない、言わない」のではなく、「自分がどう思うかは別として、相手がされて嫌だと思うことはしない、言わない」という、相手のことを思いやる考え方と行動がこれから必要だと思ったのです。

人は、少数派の意見をもつ人を差別したりいじめたりしてしまいがちです。「違うからダメ」ではなく、「違っても良い」や「違うのが当たり前」という考え方を一人一人がもつことができると差別やいじめが少なくなっていくのではないでしょうか。

全員が全員と仲良く生活していくのは無理なことかもしれません。しかし、仲良くしていくのは無理だから、相手のことは考えなくても良いというわけではあ

りません。小さい頃は皆、自分を中心に物事を考えてしまいがちなので、「自分がされて嫌なこと」と言われた方が分かりやすいのかもしれません。しかし、中学生は大人に近づいている段階にあるので、他の人のことも十分に考えられると思います。だからこそ、「相手がされて嫌だと思うこと」という考え方で、人と付き合っていくことができると良いと思います。

私達は十人十色で、多種多様な意見をもって生きています。その中で一人一人がそれを理解し、少数派の意見をもつ人も自信をもって意見を言えるような世界になればよいなと思います。

転校生

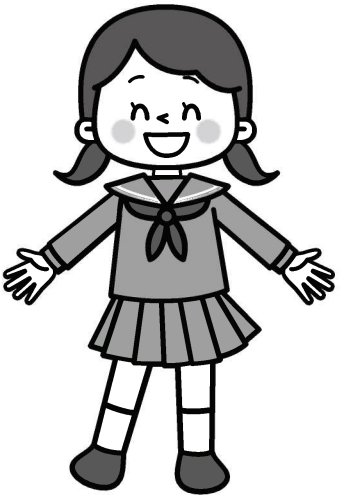
筑陽学園中学校3年　永石　彩音

私は、今でも、とても後悔していることがあります。

私の住んでいる地域には、毎年、外国からサーカスがやってきます。そのため、私が小学校六年生の時、一人の外国人の男の子が転校してき、クラスの一員として加わりました。その男の子がクラスに入ってきたとき、私は驚きました。なぜなら、外国人を近くで見ることが初めてで、髪の毛の色や目の色、私とは全く違ったからです。周りの子たちも、彼を珍しそうに見ており、興味津々で、彼を見ながらヒソヒソと話していました。彼は、日本語を話すことができず、担任の先生が彼を紹介してくれました。私は、彼が日本語を話せないことを知り、言葉が伝わらないのなら話せない、クラスは一緒でも直接、関わることはできないと心の中で思いました。

しかし、私が小学校三年生の時に一時的に転校してきたアメリカに住んでいる日本人の女の子とは話すことができました。言語が違うこと、見た目が違うことはこんなにも考え方が変わってくる、その時、私は大きな壁を感じました。その頃の私の外国人へのイメージは、凶暴で自由奔放というあまり良くないものでした。しかし、そのイメージを変えるような出来事がありました。

サーカスの終わりが近づき、彼が学校に来る最後の日、彼がサーカスの技を披露してくれました。彼がサーカスの技をし、周りを見るとみんなが笑っていました。私も、すごいと思うと同時に笑顔になりました。実際に、サーカスも見に行きました。お客さんたちは、歓声を上げ、手拍子をし、サーカスは盛り上がっていました。このような出来事があり、私は、外国人は自分が勝手に考えていたイメージとは違うことを知りました。また、言語が違っても言葉以外で表現し、相手を笑顔にすることができるということも知りました。

私は、自分の勝手な思い込みで、彼と積極的に関わろうとしなかったこと、勇気がなかったことを今でも、とても後悔しています。また、彼の立場に立ってみると、転校初日で緊張しているのに、多くの人にジロジロ見られ、ヒソヒソと何を言っているのかわからない。とても怖かっただろうと思います。

これからは、勝手な思い込みをやめ、相手の立場にたって考えようと思います。また、日本にいる外国人が多くなってきました。そのような人達に出会ったら笑顔で「ようこそ」と迎え入れたいです。